

情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異に関する考察

野崎 優樹

1. はじめに

古くから、理性と情動は対立関係にあるものとして捉えられてきた。たとえば、ゼノン、エピクテトス、マルクス・アウレリウスといったストア派の哲学者たちは、情動を非理性的なものであるとし、情動から完全に解放された状態こそが、人の魂に究極の安定と平静である「アパティア」をもたらすと主張した（遠藤, 2013）。しかし、近世から近代になると、たとえば、『人性論』（Hume, 1937 土岐・小西訳 2010）や『道徳感情論』（Smith, 1759 水田訳 2003）などの著作で、情動の働きに改めて着目し、情動と理性の関係性について問い直すような議論が行われるようになる。このような議論の中で、現在では情動と理性を単純に対立的に捉える見方は衰退してきているようである（e.g., Averill, 2007; 遠藤, 2013）。

実証研究を行う心理学でも、知的な能力と情動との相互作用を調べる研究が行われてきた。その中で、近年注目されている概念が「情動知能 (emotional intelligence)」である。この概念は、Salovey & Mayer (1990) により「自己と他者の感情及び情動を認識して区別し、思考や行動に活かす能力」と定義され提唱された。その後、特定のテストに回答を求め一般の人や専門家の回答との一致度で得点化する手法や、自分の能力について自己評定で回答を求める手法が、情動知能の測定方法として開発されている (Zeidner, Roberts, & Matthews, 2008)。これらの方法を用いて、情動知能が様々な適応と関連する指標と有意に関連することが明らかにされてきている。例を挙げると、まず心理的な指標について、情動知能の高さは、高い人生満足度や自尊心と関連することが示されている (e.g., Saklofske, Austin, & Minski, 2003; Schutte, Malouff, Simunek, McKenley, & Hollander, 2002)。さらに身体的な指標について、情動知能が高い人は、良好な健康状態を持つことが明らかにされている (e.g., Martins, Ramalho, & Morin, 2010)。また、社会的な指標についても、情動知能が高い人ほど良好な人間関係を築くことができ (Lopes, Salovey, Coté, & Beers, 2005)、学業成績や仕事の成果が高いことが分かっている (O'Boyle, Humphrey, Pollack, Hawver, & Story, 2011; Perera & DiGiacomo, 2013)。さらに、情動知能を高める方法も検討されてきており、トレーニングプログラムや、ストレス経験時の情動調整経験を通じて、情動知能は高められることが示されている (e.g., Nelis, Kotsou, Quoidbach, Hansenne, Weytens, Dupuis, & Mikolajczak, 2011; 野崎, 2013; 野崎・子安, 2013)。

このように情動知能の重要性や高める方法が明らかにされてきた一方で、この概念の妥当性をめぐる数多くの批判も同時に行われてきた。特にしばしば行われる批判の1つが、「情動知能

は本当に知能と言えるのか?」というものである (e.g., Locke, 2005; Matthews, Roberts, & Zeidner, 2004; Roberts, Zeidner, & Matthews, 2001)。このような批判を踏まえ、近年では、従来「情動知能」と呼ばれていた概念を「情動コンピテンス」と呼ぶことを提唱している研究者もいる (e.g., Boyatzis, 2009; Brasseur, Grégoire, Bourdu, & Mikolajczak, 2013; Nelis et al., 2011; Scherer, 2007)。しかし、「情動知能」と「情動コンピテンス」の概念上の差異について十分な考察は行われておらず、2つの術語の使い分け方は未だ不透明なままである。そこで、本論文では、従来「知能」と「コンピテンス」がそれぞれどのような概念を指し示してきたのかを参照しつつ、「情動知能」と「情動コンピテンス」の概念上の差異に関する考察を行う。本論文では、まず、過去の研究で「知能」と「コンピテンス」という概念がどのような内容を指し示すものとして扱われ、両者の区分についてどのように考えられていたのかを確認する。続いて、情動知能が知能であることを主張した研究、そのことに対する批判を行った研究、そして、情動知能を「情動コンピテンス」と呼ぶことを主張した研究を展望する。最後に、これらの議論を踏まえて、情動知能と情動コンピテンスの概念上の区分について考察し、今後の研究について議論する。

2. 知能とは? コンピテンスとは?

知能検査は、就学児に発達の遅れが見られるかどうかを診断する必要性の高まりを受けて、1905年にAlfred Binetにより初めて開発された。さらに1916年には、Lewis Termanにより、この知能検査の改訂が行われるとともに、William Sternにより提唱されたIQの概念が取り入れられ、スタンフォード・ビネー知能検査が発表された。現在の研究でも広く用いられているIQは、「精神年齢 / 生活年齢 × 100」の公式で算出することができ、精神年齢と生活年齢が一致していればIQは100となる指標である。また、第一次大戦中には、Robert Yerkesにより兵士の選別を目的として集団方式の知能検査が開発された。さらに、1939年にはDavid Wechslerにより、言語性IQと動作性IQを測定することができるウェクスラー式知能検査が開発された。これらの知能検査は、いずれも最大限の知的能力に着目し、参加者がある特定の問題を正確にあるいは速く解けるかを調べている点が特徴である。現在、知能が何を指し示しているかについては研究者間で相違が見られるものの、「経験から学習し、抽象的に考え、環境に効率的に対処する能力」として考えられているようである (Nolen-Hoeksema, Fredrickson, Loftus, & Wagenaar, 2009)。

一方で、このような知能よりもコンピテンスを測定対象とすることの重要性を主張したのがMcClelland (1973) である。McClelland (1973) は、従来の知能テストは学業成績を予測する証拠は多くあるものの、知能テストの成績が仕事での成功と関連する確かな証拠は必ずしも見いだされないことを指摘した。そして、仕事のパフォーマンス、リーダーシップ、対人的なスキルとより強く関わり、学習の結果が反映されうる能力としてコンピテンスを捉え、「最大限の能力」である知能よりも、「あまり構造化がされていない状況での思考や行動パターンの特徴」であるコンピテンスを測定することの重要性を主張した。その後、コンピテンスの具体的な測定方法が開発されるとともに、コンピテンスの高さが実際に仕事での成功と結びつくことが示されてきた (Boyatzis, 1982; McClelland, 1998; Winter, McClelland, & Stewart, 1981)。コンピテンスが知能よりも仕事での成功を強く予測するという考えに対しては反対意見も出されているもの (e.g., Barrett & Depinet, 1991)、日常生活における優れた成果を予測する概念として現在も関心が

集められている。近年の研究では、コンピテンスは、「意図を中心にまとめられた関連した様々な一連の行動を適切に実行する能力」と定義されている (Boyatzis, 2008)。

以上のような先行研究を踏まえて、知能とコンピテンスの違いについてまとめたものが、Table 1である。特に両者が重視している点を見てみると、知能は良いパフォーマンスを導くための反応や行動の背後にある最大限の能力に注目していると言える (e.g., Carroll, 1993)。それに対して、コンピテンスは良いパフォーマンスと直接的に結びつく行動傾向に注目している (e.g., Boyatzis, 2008)。つまり、最大限の能力に注目しているか、もしくは意図に基づく行動傾向という面に注目しているかという点を知能とコンピテンスの大きな相違点として考えることができる。

Table 1 先行研究における知能とコンピテンスの違い

	知能	コンピテンス
定義	経験から学習し、抽象的に考え環境に効率的に対処する能力 (Nolen-Hoeksema et al., 2009)	意図を中心にまとめられた関連した様々な一連の行動を適切に実行する能力 (Boyatzis, 2008)
提唱された背景	個人の知的能力を診断する必要性の高まり (例：特別支援学級，軍隊)	知能テストが仕事での成功と必ずしも関連するとは言えず、より強く仕事のパフォーマンス、リーダーシップ、対人的なスキルと関わる概念の測定が重要 (McClelland, 1973)
注目している点	良いパフォーマンスを導くための反応や行動の背後にある、最大限の能力に注目 (e.g., Carroll, 1993)。	良いパフォーマンスと直接的に結びつく、意図に基づく行動傾向に注目 (e.g., Boyatzis, 2008)。

3. 情動知能を知能とする主張とそれに対する批判

それでは、情動知能はどのような背景に基づき、知能として扱われてきたのだろうか。情動知能を初めに提唱した Salovey & Mayer (1990) では、情動知能は、社会的知能の下位要素の1つとしている。社会的知能とは、「人を理解し、調整する能力」のことである (Thorndike & Stein, 1937, p.275)。社会的知能の概念に関する議論や測定の試みが積み重ねられる中で (e.g., Ford & Tisak, 1983; Gardner, 1983; Sternberg, 1985; Walker & Foley, 1973; レビューとして子安, 1989), 社会的知能も知能であると位置づけられてきたため、Salovey & Mayer (1990) は、その下位要素である情動知能も知能であるとしている。さらに、情動と知能を結びつけることへの批判に答えるために書かれた Mayer & Salovey (1993) では、情動知能が社会的知能の下位要素の1つであることを繰り返すとともに、行動傾向の背後にある一連の知的能力を対象とする概念であるために、情動知能は知能であるという主張をしている。また、情動知能と情動コンピテンスの比較に関する記述も見られ、情動知能は情動コンピテンスとして呼ぶこともできるが、自分たちの枠組みを知能の歴史的な文献と結びつけるために、情動知能という呼び方を選択すると述

べている。この記述に見られるように、この時点では情動知能と情動コンピテンスについて明確な区分をしていないようであるが、その後の Mayer & Salovey (1997) では、両者の区分に関する議論が見られる。この文献では、コンピテンスを「ある人が特定の基準を達成すること」と定義している。そして、情動コンピテンスでは状況の違いを越えて適切に動くために個人が獲得可能な知識やスキルに注目しているため、心理的な能力であり教育とはあまり関連がない概念である情動知能とは異なる概念であると述べられている。また、情動知能は、行動の選好傾向である「特性」や、知的さが関係しない能力である「才能」とは異なる概念であることも述べられている。

さらに、情動知能が知能の要件を満たしていることを実証的に検討することを試みた研究が、Mayer, Caruso, & Salovey (1999) である。この研究では、ある概念が知能であることの要件を満たすことを示す基準として、概念的基準、相関的基準、発達の基準の3つを挙げている。概念的基準とは、対象とする概念が、行動の選好傾向・自尊心・知的さとは関連しない才能ではなく、知的な能力を測定しているかどうかというものである。さらに、知的な能力は、問題としている概念（情動知能の場合は情動と関連する能力）を明白に測定すべきであるとしている。次に、相関的基準とは、新しいテストが、すでに確立された他の知能と一定程度関連しているが、独自の要素を持つ一連の能力を測定しているかという基準である。この基準は相関分析を行うことで実証的に検討可能である。最後に発達の基準とは、測定対象が年齢や経験に伴い成長するかという基準である。これまでの研究で知能は年齢に伴い成長することが知られており (Fancher, 1985)、このような研究結果に基づいた基準である。そして、Mayer et al. (1999) では、情動知能の4つの領域12の能力を測定できるテスト (Multifactor Emotional Intelligence Scale; MEIS) を開発し、このテストの得点が既存の言語知能と中程度に相関し、青年期よりも成人期の人の得点が高かったことを明らかにした。この結果を基に、情動知能は、前述した3つの基準を満たしており、知能として扱うことができると結論づけている。

このように、情動知能の提唱者たちは、情動知能が「知能」であることを繰り返し主張してきた。しかし、この主張に対しては数多くの批判も同時に行われてきた。たとえば、Roberts et al. (2001) は、これまでの知能研究では低次な感覚処理能力（例：聴覚処理、触覚・運動感覚の知覚）は高次な認知処理能力（例：帰納的・演繹的推論）よりも因子負荷量が低いにも関わらず、MEISの因子分析結果では最も低次な能力の「情動の知覚」の因子負荷量が最も高く、最も高次な能力の「情動の調整」の因子負荷量が最も低いことから、MEISで測定しているものを知能として捉えることについて疑問を呈している。さらに、特に知能の中でも流動性知能のような認知的な能力は年齢に従い低下するという先行研究 (e.g., Carroll, 1993) もあることから、知能の要件として Mayer et al. (1999) の発達の基準を用いることの妥当性を批判している。また、概念的な面での批判も行われており、たとえば、Locke (2005) は、情動知能の下位要素である自己や他者の情動を観察する能力は個人の注意の問題であり、知的な能力は必要とされないことを指摘している。さらに、日々の行動に個人の知識を使うことは、理性・集中・誠実さ・個人の目的といった多くの異なる要因が関連するため、知能の問題ではなく、習慣・技術・選択が組み合わさった問題であることを指摘している。また、Côté (2010) も、最大限のパフォーマンスと典型的な行動を明確に区別することで、情動知能に「知能」という術語を使うことを研

研究者たちはもっと真剣に考えるべきという提言をしている。

このように情動知能を「知能」と呼ぶことに対する批判を受けて、近年のいくつかの研究では、この概念を「情動コンピテンス」と呼ぶことを提唱し始めている。たとえば、Scherer (2007) では、既存の情動知能の概念やテストで強調されている「情動についての知識」という要素は、結晶性知能に対応する別の概念として区分して考えるべきであると主張している。そして、誤解を生じさせる「知能」という用語を概念の名称から削除し、本来測定を試みていた情動メカニズムを適切に用いる能力を「情動コンピテンス」として呼ぶことを提唱している。ここでの情動メカニズムは、特に、情動の適応的な機能に特徴づけられる身体的・行動的な変化の全体的なパターンである「情動の生成」と、他者の情動状態を正確に知覚し解釈する能力である「情動の知覚」のことを指すとしている。さらに、コンピテンスは特性的な能力と具体的なスキルの間に位置づけられるものであるとしており、個別の領域を超えて一般化できる手続き的知識として捉えている。また、このように捉えられる情動コンピテンスは、社会環境に対する適応という結果の部分ではなく、その決定要因である情動メカニズムを用いるパフォーマンスによって評価されるべきであると主張している。また、Boyatzis (2009) は、従来情動知能として概念化されてきた要素の中でも、その人の情動と関連する行動パターンに注目することで仕事などにおけるパフォーマンスをより強く予測することができるため、これを概念の対象とすべきであり、行動面からアプローチすることで測定できる要素を「情動コンピテンス」として呼ぶことを提唱している。このような議論により、自他の情動を適切に扱う能力を「知能」と呼ぶことにより生じる混乱を解消し、どのような概念を測定しようとしているのかを明確にすることが試みられている。

さらに、このような概念的な議論を受けて、近年は実証的な研究でも「情動コンピテンス」という術語を用いているものが見られる。たとえば、トレーニング効果を検証した研究である Kotsou, Nelis, Grégoire, & Mikolajczak (2011) および Nelis et al. (2011) では、測定方法は既存の情動知能尺度を用いているものの、「情動知能」ではなく、「情動コンピテンス」を術語として用いている。また、Brasseur et al. (2013) や Mikolajczak, Brasseur, & Fantini-Hauwel (2014) では、情動コンピテンスを測定する尺度として、Profile of Emotional Competence およびその短縮版を作成している。

このように、近年の議論では、情動知能と情動コンピテンスの概念上の区分や妥当性が意識され始めてきていると言える。しかし、この2つの概念について、両者の棲み分けや関連の仕方は、未だ十分な議論が行われているとは言えない状況である。そこで、次節ではそもそも知能やコンピテンスがどのような概念を指し示してきたのかを参照しつつ、両者の概念上の区分に関する考察を行う。

4. 情動知能と情動コンピテンスの概念上の区分

第2節で議論したように、最大限の能力に注目しているか、それとも良いパフォーマンスと直接的に関連する行動傾向という面に注目しているかという点が、知能とコンピテンスの大きな相違点であった。本稿では、情動を扱う能力にこの区分を当てはめ、情動知能と情動コンピテンスが対象とする内容の違いをまとめたモデル図であるFigure 1を提案する。知能研究では、

Cattell (1971) による、生涯を通じて獲得した知識や技能へアクセスする能力が関わる「結晶性知能」と、知識が関係しない新規な状況での論理的思考や問題解決能力が関わる「流動性知能」の分類がよく用いられている。この区分を基にして、Figure 1でも結晶性情動知能と流動性情動知能を区分している。結晶性情動知能は、たとえば、どのような状況がどのような情動を引き起こすのか、ある情動を表出すると他の人にどのような影響を与えるのか、ある場面で情動を調整にはどのような方略を取ると良いのかなどの「情動に関する知識」を指している。それに対して、流動性情動知能は、情動が関連する情報を一時的に保持したり、操作したりする際に働く「情動と関連する情報を処理する能力」を指している。一方、情動コンピテンスは、これらの結晶性情動知能と流動性情動知能を生かして実際の場面で実施する「成果を達成できる情動的な反応や行動の傾向」のことを指している。これは、コンピテンスは成果と直接的に結びつく、意図に基づく行動傾向という面に注目している (Boyatzis, 2008; McClelland, 1973) という先行研究のコンピテンスの概念に関する議論を踏まえている。

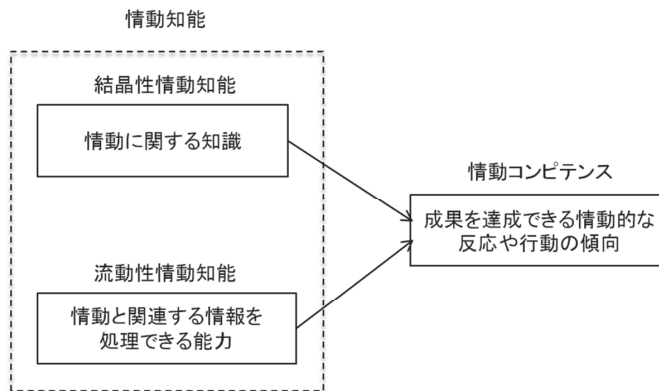


Figure 1 情動知能と情動コンピテンスが指し示す内容の違い

Figure 1 のモデルでは、知識—能力—行動という区分に基づき、それぞれが対象とする概念の違いを説明しているが、この区分は、Mikolajczak (2009) の3段階モデルを踏まえている。Mikolajczak (2009) では、情動知能もしくは情動コンピテンスが対象とする内容を、「複雑かつ幅広い範囲の情動についての宣言的知識」、「求められれば実行可能な情動と関連する能力」、「情動が関係する状況での普段の振る舞い方の傾向」の3つの段階に分けられることを指摘している。さらに、この3つの段階の関係について、知識と能力は普段の振る舞い方の傾向の基礎になることが述べられており、また、知識は常に能力に変換されるわけではなく、能力は常に普段の行動に変換されるわけではないことから、この個人差の3つの段階の関連はゆるやかであるとしている。Mikolajczak (2009) では、あくまで情動知能もしくは情動コンピテンスと呼ばれている内容の分類のみを議論しているものの、Figure 1 に示した通り、この分類は、情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異に対応させることができると考えられる。さらに、このモデルで、結晶性情動知能と流動性情動知能から情動コンピテンスへの矢印が引かれているのは、情動についての知識と能力を基礎として普段の振る舞い方の傾向が決められるとする

Mikolajczak (2009) の議論を踏まえてのことである。

それでは、これまでの情動知能もしくは情動コンピテンス研究では、このモデルの結晶性情動知能、流動性情動知能、情動コンピテンスのうち、どのような面を測定してきたのだろうか。これについてまとめた表が Table 2 である。現在の研究では、客観的テストと自己報告式の質問紙の2つが主に用いられている (Zeidner et al., 2008)。まず客観的テストについて、大部分の研究で用いられているのが、Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test (MSCEIT; Mayer, Salovey, Caruso, & Sitarenios, 2003) である。これは、Table 2 に示した8種類のテストから構成されており、テストの正解は、大部分がアメリカ人である一般の成人の回答か、もしくは西洋の国の情動の研究者の回答とどの程度一致しているかによって決められる。この8種類のテストの内容を見てみると、そのいずれもが結晶性情動知能を測定していることが分かる。たとえば、顔写真や風景もしくは抽象的なデザインを見て、個々の情動がどの程度現れているかを評定する顔表情と絵画課題は、刺激の種類と情動の対応関係に関する知識が個人内で確立されている程度を調べるものである。また、感覚、促進、混合、変化の4つの課題は、情動の種類や情動がどのような機能を持つかといった情動についての知識を調べるものであり、結晶性情動知能を測定していると考えられる。最後に、文章を読み、登場人物が情動と関連する特定の目的を達成するために、各行動がどの程度効果的であるかを評定する情動の管理、情動的な人間関係の両課題も、情動と関連する状況でどのような行動が効果的なのかという知識を調べるものであり、結晶性情動知能を測定していると言える。

それに対して、自己報告式の質問紙では、情動的な反応や行動の傾向についての文章を読み、その内容が普段の自分にどの程度よく当てはまるのかを評定する。たとえば、よく用いられている質問紙である Trait Emotional Intelligence Questionnaire short-form (Petrides & Furnham, 2006; 日本語版: 阿部・若林・西城・川上・藤崎・丹羽・鈴木, 2012) では、「自分がどんな感情を抱いているのか自分でも理解できないことがある」「ストレスをうまく対処できる」といった文章を読み、これらの内容がどの程度普段の自分に当てはまるのかを評定している。これは普段の情動的な反応や行動の傾向を測定の対象としているため、情動コンピテンスを測定していると言えるだろう。ただし、この方法ではあくまで普段の傾向を自分自身の認識で測定しているため、実際に測定しているのは「自己評定による情動コンピテンス」であることに留意しておく必要がある。

このような議論を踏まえると、「情動知能」と「情動コンピテンス」のどちらの術語を用いるべきかという問いに対しては、研究が対象としている概念に応じて使い分けるべきであると答えることができる (Figure 1 も参照)。つまり、情動に関する知識を研究の対象として、現在の研究で使われているような客観テストを用いて測定を試みているのならば、それは特に結晶性の「情動知能」を研究対象としていると考えるべきである。一方、情動と関連する反応や行動の傾向を研究の対象とし、測定を試みているのならば、それは「情動コンピテンス」を研究対象としていると考えるべきであろう。この点が情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異であると言える。

Table 2 既存の情動知能テストの測定対象

テストの種類	内容	測定対象
<u>客観テスト (Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test)</u>		
顔表情 (Face)	顔写真を見て、個々の情動がどの程度顔表情に現れているかを評定	結晶性情動知能
絵画 (Picture)	風景や抽象的なデザインを見て、個々の情動がどの程度その写真やデザインに現れているかを評定	〃
感覚 (Sensation)	ある情動を抱いている場面を想像させ、その時に感じている感覚の程度を評定	〃
促進 (Facilitation)	ある情動が特定の認知活動に対してどの程度役立つかを評定	〃
混合 (Blends)	ある他の情動の組み合わせにより、どのような情動が生じるのかを選択	〃
変化 (Changes)	ある情動が強められた結果、どのような情動が生じるのかを選択	〃
情動の管理 (Emotional management)	文章を読み、登場人物が特定の情動を感じる上で、各行動がどの程度効果的かを評定	〃
情動的な人間関係 (Emotional relationships)	文章を読み、情動を喚起された登場人物が良い人間関係を築く上で各行動がどの程度効果的かを評定	〃
<u>自己報告式の質問紙</u>	情動的な反応や行動の傾向についての文章を読み、普段の自分にどの程度よく当てはまるのかを評定	自己評定による情動コンピテンス

5. 本論文の意義と今後の展望

本論文では、「情動知能」と「情動コンピテンス」の概念上の区分について、そもそも先行研究にて知能やコンピテンスがどのような概念を指し示していたのかを参照しつつ考察を行った。そして、現在の研究で測定を試みている概念のうち、情動に関する知識を「結晶性情動知能」と呼び、成果を達成できる情動的な反応や行動の傾向を「情動コンピテンス」と呼ぶことを提案した。これまで情動知能研究に関する問題点として、この概念は本当に知能と呼べるのか、さらにそもそもこの概念は何を指しているのが曖昧であるという点が繰り返し指摘されてきた (e.g., Locke, 2005; Roberts et al., 2001; Zeidner et al., 2008)。本論文は、Boyatzis (2009) や Scherer (2007) で議論されてきたような「情動コンピテンス」という術語を用いることの重要性を明確にするとともに、幅広い内容を含む概念である情動知能もしくは情動コンピテンスがどのような内容を指し示しており、どのように術語を使い分けるべきであるかを整理することに貢献した点で意義がある。

今後の展望として注目したい点に、流動性情動知能および情動コンピテンスを測定する方法の開発が挙げられる。本研究のモデルに基づくと、既存の情動知能もしくは情動コンピテンス

のテストでは、情動と関連する情報を処理する能力である流動性情動知能を測定する方法が開発されていない。もし情動知能研究が、知能研究に倣い、知識に依存しない情報処理能力も含めて包括的に知的な能力を測定することを試みるのであれば、この概念も測定できるような方法を開発していく必要があるだろう。その際には、情動的なワーキングメモリを測定する課題 (Mikels, Reuter-Lorenz, Beyer, & Fredrickson, 2008) などの既存の実験パラダイムが参考になると考えられる。

さらに、現在の情動コンピテンスを測定する方法では、普段の情動的な反応や行動の傾向を自分自身の認識に基づき測定している。そのため、自己報告以外にも、より直接的な形で情動コンピテンスを測定する方法の開発も重要である。このような方法を開発する際に参考になると考えられるのが、情動知能の個人差が具体的な社会的な場面でどのような行動の違いとして現れてくるのかを調べる研究である。たとえば、Fernández-Berrocal, Extremera, Lopes, & Ruiz-Aranda, (2014) は、囚人のジレンマゲームを用いて、情動知能の個人差が協力/裏切りの選択率に対して、相手の行動に応じてどのように違いとして現れてくるのかを明らかにしている。さらに、Nozaki & Koyasu (2013a, 2013b) では、社会的排斥経験後の報復行動に対して、情動知能の個人差がどのように現れてくるのかを明らかにしている。このような研究を積み重ね、情動知能が高い人が具体的な社会的な場面でどのような振る舞いをするのかを明らかにすることで、情動が関連する社会的な場面を実験的に設定し、そこでの行動を測定する課題を用いることで、より直接的な方法での情動コンピテンスの測定が可能になると考えられる。特に、そもそもこの分野の研究が発展してきた背景として、多くの種類の社会的な成功に対して、従来検討されてきた認知的な能力だけでは十分説明できない部分を捉えようとした動きがあったことを踏まえると、このような測定方法を開発し、「情動知能」よりも「情動コンピテンス」を捉えようとするのは、本来の目的に沿った研究の発展につながると考えられるため、より一層の研究が望まれると言えるだろう。

私たちが社会生活を送る上で、自他の情動を適切に認識して調整する能力は重要な役割を果たす。しかし、この能力には数多くの要素が含まれており、明確な定義の下で議論を行わなければ、しばしば混乱を引き起こす。本論文の考察に基づき、情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異を踏まえて議論を行うことで、このような混乱を防ぎ、今後の研究の発展につなげていくことができるだろう。

文献

- 阿部恵子・若林英樹・西城卓也・川上ちひろ・藤崎和彦・丹羽雅之・鈴木康之 (2012). Trait Emotional Intelligence Que-SF と Jefferson Scale of Physician Empathy の日本語版開発と信頼性・妥当性の検討. *医学教育*, **43**, 351-359.
- Averill, J. R. (2007). Together again: Emotion and intelligence reconciled. In G. Matthews, M. Zeidner, & R. Roberts (Eds), *The science of emotional intelligence: Knowns and unknowns* (pp. 49-71). New York: Oxford University Press.
- Barrett, G. V, & Depinet, R. L. (1991). A reconsideration of testing for competence rather than for intelligence. *American Psychologist*, **46**, 1012-1024.

- Boyatzis, R.E. (1982). *The competent manager: A model for effective performance*. New York: Wiley-Interscience.
- Boyatzis, R. E. (2008). Competencies in the 21st century. *Journal of Management Development*, **27**, 5-12.
- Boyatzis, R. E. (2009). Competencies as a behavioral approach to emotional intelligence. *Journal of Management Development*, **28**, 749-770.
- Brasseur, S., Grégoire, J., Bourdu, R., & Mikolajczak, M. (2013). The profile of emotional competence (PEC): Development and validation of a self-reported measure that fits dimensions of emotional competence theory. *PLoS ONE*, **8**, e62635.
- Carroll, J. B. (1993). *Human cognitive abilities: A survey of factor-analytic studies*. New York: Cambridge University Press.
- Cattell, R. B. (1971). *Abilities: Their structure, growth, and action*. New York: Houghton Mifflin
- Côté, S. (2010). Taking the “intelligence” in emotional intelligence seriously. *Industrial and Organizational Psychology*, **3**, 127-130.
- 遠藤利彦 (2013). 「情の理」論 — 情動の合理性をめぐる心理学的考究 — . 東京大学出版会.
- Fancher, R. E. (1985). *The intelligence men: Makers of the IQ controversy*. New York: W.W. Norton.
- Fernández-Berrocal, P., Extremera, N., Lopes, P. N., & Ruiz-Aranda, D. (2014). When to cooperate and when to compete: Emotional intelligence in interpersonal decision-making. *Journal of Research in Personality*, **49**, 21-24.
- Ford, M. E., & Tisak, M. S. (1983). A further search for social intelligence. *Journal of Educational Psychology*, **75**, 196-206.
- Gardner, H. (1983). *Frames of mind: The theory of multiple intelligences*. New York: Basic Books.
- Gottfredson, L. (1997). Mainstream science on intelligence: An editorial with 52 signatories, history, and bibliography. *Intelligence*, **24**, 13-23.
- Hume, D. (1739). *A treatise of human nature*. (ヒューム, D. 土岐邦夫・小西嘉四郎 (訳) (2010). 人性論. 中公クラシック.)
- Kotsou, I., Nelis, D., Grégoire, J., & Mikolajczak, M. (2011). Emotional plasticity: Conditions and effects of improving emotional competence in adulthood. *Journal of Applied Psychology*, **96**, 827-839.
- 子安増生 (1989). 社会的知能の研究 — 文献展望 — . 京都大学教育学部紀要, **35**, 134-153.
- Locke, E. A. (2005). Why emotional intelligence is an invalid concept. *Journal of Organizational Behavior*, **26**, 425-431.
- Lopes, P. N., Salovey, P., Coté, S., & Beers, M. (2005). Emotion regulation abilities and the quality of social interaction. *Emotion*, **5**, 113-118.
- Matthews, G., Roberts, R. D., & Zeidner, M. (2004). Seven myths about emotional intelligence. *Psychological Inquiry*, **15**, 179-196.
- Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, **27**, 267-298.

- Mayer, J. D., Roberts, R. D., & Barsade, S. G. (2008). Human abilities: Emotional intelligence. *Annual Review of Psychology*, **59**, 507-536.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1993). The intelligence of emotional intelligence. *Intelligence*, **17**, 433-442.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey, & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books.
- Mayer, J. D., Salovey, P., Caruso, D. R., & Sitarenios, G. (2003). Measuring emotional intelligence with the MSCEIT V2.0. *Emotion*, **3**, 97-105.
- McClelland, D. C. (1973). Testing for competence rather than for "intelligence". *American Psychologist*, **28**, 1-14.
- McClelland, D. C. (1998). Identifying competencies with behavioral-event interviews. *Psychological Science*, **9**, 331-339.
- Mikels, J. A., Reuter-Lorenz, P. A., Beyer, J. A., & Fredrickson, B. L. (2008). Emotion and working memory: Evidence for domain-specific processes for affective maintenance. *Emotion*, **8**, 256-266.
- Mikolajczak, M. (2009). Going beyond the ability-trait debate : The three-level model of emotional intelligence. *Electronic Journal of Applied Psychology*, **5**, 25-31.
- Mikolajczak, M., Brasseur, S., & Fantini-Hauwel, C. (2014). Measuring intrapersonal and interpersonal EQ: The Short Profile of Emotional Competence (S-PEC). *Personality and Individual Differences*, **65**, 42-46.
- Nelis, D., Kotsou, I., Quoidbach, J., Hansenne, M., Weytens, F., Dupuis, P., & Mikolajczak, M. (2011). Increasing emotional competence improves psychological and physical well-being, social relationships, and employability. *Emotion*, **11**, 354-366.
- Nolen-Hoeksema, S., Fredrickson, B. L., Loftus, G. R., & Wagenaar, W. A. (2009). *Atkinson & Hilgard's introduction to psychology*. 15th ed. Hampshire, UK: Cengage Learning.
- 野崎優樹 (2013). 定期試験期間の自他の情動調整行動が情動知能の変化に及ぼす影響. *教育心理学研究*, **61**, 362-373.
- 野崎優樹・子安増生 (2013). 大学入試に対する認知的評価とストレス対処が情動知能の成長感到及ぼす効果. *パーソナリティ研究*, **21**, 231-243.
- Nozaki, Y. & Koyasu, M. (2013a). Effects of emotional intelligence on inhibiting retaliation for ostracism in Cyberball. *Psychologia*, **56**, 167-178.
- Nozaki, Y. & Koyasu, M. (2013b). The relationship between trait emotional intelligence and interaction with ostracized others' retaliation. *PLoS One*, **8**, e77579.
- O'Boyle, E. H., Humphrey, R. H., Pollack, J. M., Hawver, T. H., & Story, P. A. (2011). The relation between emotional intelligence and job performance: A meta-analysis. *Journal of Organizational Behavior*, **32**, 788-818.
- Perera, H. N., & DiGiacomo, M. (2013). The relationship of trait emotional intelligence with academic performance: A meta-analytic review. *Learning and Individual Differences*, **28**, 20-33.
- Petrides, K. V., & Furnham, A. (2006). The role of trait emotional intelligence in a gender-specific

- model of organizational variables. *Journal of Applied Social Psychology*, **36**, 552-569.
- Roberts, R. D., Zeidner, M., & Matthews, G. (2001). Does emotional intelligence meet traditional standards for an intelligence? Some new data and conclusions. *Emotion*, **1**, 196-231.
- Saklofske, D., Austin, E., & Minski, P. (2003). Factor structure and validity of a trait emotional intelligence measure. *Personality and Individual Differences*, **34**, 707-721.
- Salovey, P., & Mayer, J. D. (1990). Emotional intelligence. *Imagination, Cognition, and Personality*, **9**, 185-211.
- Scherer, K. R. (2007). Componential emotion theory can inform models of emotional competence. In G. Matthews, M. Zeidner, & R. Roberts (Eds), *The science of emotional intelligence: Knowns and unknowns* (pp. 101-126). New York: Oxford University Press.
- Schutte, N. S., Malouff, J. M., Simunek, M., McKenley, J., & Hollander, S. (2002). Characteristic emotional intelligence and emotional well-being. *Cognition and Emotion*, **16**, 769-785.
- Sternberg, R. J. (1985). *Beyond IQ: A triarchic theory of human intelligence*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Smith, A. (1759). *The theory of moral sentiments*. (スミス, A. 水田洋 (訳) (2003). 道德感情論 (上) (下) . 岩波文庫.)
- Thorndike, R. L., & Stein, S. (1937). An evaluation of the attempts to measure social intelligence. *Psychological Bulletin*, **34**, 275-285.
- Walker, R. E., & Foley, J. M. (1973). Social intelligence: Its history and measurement. *Psychological Reports*, **33**, 839-864.
- Winter, D. G., McClelland, D. C., & Stewart, A. J. (1981). *A new case for the liberal arts: Assessing institutional goals and student development*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Zeidner, M., Roberts, R. D., & Matthews, G. (2008). The science of emotional intelligence: Current consensus and controversies. *European Psychologist*, **13**, 64-78.

謝辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科の子安増生先生に深く感謝申し上げます。

(日本学術振興会特別研究員 教育認知心理学講座 博士後期課程2回生)
(受稿 2014年9月1日、改稿 2014年11月20日、受理 2014年12月26日)

情動知能と情動コンピテンスの概念上の差異に関する考察

野崎 優樹

私たちが社会生活を送る上で、自他の情動を適切に扱う能力は重要な役割を果たす。これまでの研究で、この能力は「情動知能」として概念化され、多くの関心を集められてきた。しかしその一方で、この概念の妥当性に関する数多くの批判も行われてきた。特によく行われる批判が、情動知能は本当に知能と言えるのか？というものである。このような批判を踏まえ、近年では、従来「情動知能」と呼ばれていた概念を「情動コンピテンス」と呼ぶことを提唱している研究者もいる。しかし、「情動知能」と「情動コンピテンス」の概念上の差異について十分な考察は行われておらず、2つの概念がそれぞれどういう内容を指し示しているのかについては未だ不透明なままである。そこで、本論文では、従来「知能」と「コンピテンス」がそれぞれどのような内容を指し示してきたのかを参照しつつ、「情動知能」と「情動コンピテンス」の概念上の差異に関する考察を行う。

Conceptual Distinction between Emotional Intelligence and Emotional Competence

NOZAKI Yuki

The ability to appraise and regulate emotions appropriately plays an important role in leading successful social lives. This ability has been conceptualized as “emotional intelligence.” The general public as well as academia have shown considerable interest in this construct. In contrast, this construct has also been criticized for its conceptual validity. One of the frequent criticisms is whether emotional intelligence is really a kind of intelligence. Based on this criticism, some researchers proposed that people should call this construct “emotional competence” rather than “emotional intelligence.” Nevertheless, there have not been sufficient discussions about the conceptual distinction between “emotional intelligence” and “emotional competence.” It remains unclear what kinds of content each concept indicates. Based on this background, this paper discusses conceptual distinction between “emotional intelligence” and “emotional competence,” referring to what kinds of content each “intelligence” and “competence” originally indicated.

キーワード： 情動コンピテンス， 情動知能， 知能， コンピテンス

Keywords: Emotional competence, Emotional intelligence, Intelligence, Competence

